

陸連時報 三

2015
平成27年

8

月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

会長就任にあたって	198
公益財団法人日本陸上競技連盟 評議員・理事・監事・専門委員長	199
専務理事3期目就任にあたり	200
専門委員長挨拶	201
評議委員会・理事会報告	204
第21回アジア陸上競技選手権大会報告	206
河野洋平 本連盟名誉会長 国際陸上競技連盟 (IAAF) シルバー勲章受章	208
連載企画：世界のジュニア競技者育成 ①イギリスのジュニア育成システムの改革	209
大会観戦ガイド	210
陸協NEWS	212
事務局からのお知らせ	214

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

会長就任に あたって



会長 横川 浩

このたび私は、任期満了に伴う役員改選におきまして、引き続き、公益財団法人日本陸上競技連盟会長を拝命いたしました。本連盟は、本年3月に創立90周年を迎え、我が国の陸上競技界を統括し、代表する組織として関係各位の皆様にご理解ご協力をいただきながら陸上競技のみならず、日本のスポーツ界の発展に少しでも資することができるよう努めて参りたいと考えております。

今までの2年間の会長職を振り返りまして、2013年9月に決定しました2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催は、スポーツを取り巻く環境を大きく変化させました。もちろん、陸上競技界としてその例外ではなく、むしろこの大きな変化に機敏に対応し、スポーツ界を牽引する役割を果たしていかなければなりません。

オリンピックや世界陸上競技選手権などの世界の舞台での選手の活躍は、日本に活力をもたらすとともに、本連盟としても各種施策を推し進め国際競技力の向上をこれまで以上に目指し、若い世代を育ててまいります。

また、昨今子どもたちの体力低下など、スポーツ離れが盛んに言われていますが、スポーツの基本となる「走る」「跳ぶ」「投げる」という陸上競技の果たす役割として、裾野の拡大を目指し、地域での普及、育成活動をこれまで以上に多角的に行うとともに、スポーツを行う「場」の提供、仕組み作りなどに取り組みたいと考えております。加えて、指導者の存在はあらゆる面で欠かせないものです。多くの子どもたちに真のスポーツの楽しさ、スポーツを行うことでの人生の豊かさを感じていくきっかけを作る役割が指導者であり、本連盟の重要な責務として指導者養成に取り組んでまいりたいと思います。

こうしたスポーツ界の多くの課題や大きな目標に向け、それらを成し遂げていく基盤となる組織の充実、地域や関連団体との連携をより進め、多くの関係者とともに歩み、取り組んでまいれる所存ですので、皆様のご理解、ご支援をお願いいたしまして就任のご挨拶といたします。

公益財団法人日本陸上競技連盟 評議員・理事・監事・専門委員長

【評議員 20名】 任期：2015年6月17日から2019年の定時評議員会の終結の時まで

評議員会議長	中曽根弘文			
評議員会副議長	尾崎 宏			
評 議 員	羽角 光一	高木 義雄	和中 信男	長谷川巧治
	南 正晃	詫間 茂	奥山 幸男	西川晃一郎
	舟橋 昭太	岡 佳子	芦田 昭充	安藤 宏基
	大田 弘子	名古 岳彦	野田 健	増田 明美
	松本 正之	松本 正義		

【理事 30名】 任期：2015年6月17日から2017年の定時評議員会の終結の時まで

会 長	横川 浩			
副 会 長	友永 義治	八木 雅夫		
専 務 理 事	尾縣 貢			
理 事	橋本 秀樹	佐藤 隆	潮田 茂	保坂 一仁
	平塚 和則	川島 茂	稲垣 裕	松澤 二一
	中窪 章二	永里 初	浜崎 正信	中山 桂
	串間 敦郎	大西 清司	山本 浩	原田 康弘
	清水 真	小手川強二	鈴木 一弘	繁田 進
	山澤 文裕	瀬古 利彦	永井 立子	平田 竹男
	高橋 尚子	室伏 広治		

【監事 3名】 任期：2015年6月17日から2017年の定時評議員会の終結の時まで

監 事	山田 浩一	前島 伸行	有吉 正博
-----	-------	-------	-------

【専門委員長】 任期：2015年6月17日から2017年の定時評議員会の終結の時まで

総務委員長	山本 浩
強化委員長	原田 康弘
法制委員長	清水 真
財務委員長	小手川強二
競技運営委員長	鈴木 一弘
普及育成委員長	繁田 進
国際委員長	尾縣 貢
施設用器具委員長	平塚 和則
科学委員長	杉田 正明
医事委員長	山澤 文裕

専務理事3期目就任にあたり

専務理事 尾 縣 貢



6月17日の理事会にて専務理事職を拝命し、3期目を務めることになりました。これまでの4年間を振り返り、明確になった課題に対して迅速に対応するとともに、2020年東京オリンピックに向けての新たな課題に取り組むことで、日本陸上競技界の益々の発展のために努力していく所存です。

この2年を振り返る

2013年9月にオリンピック・パラリンピック競技大会の東京開催が決定し、翌年1月24日の組織委員会の発足を機に2020年に向けての本格的なスタートが切られました。本連盟においても、2020年強化特別対策プロジェクト（2020PT）を設置し、①金メダル1を含む5つのメダルを獲得すること、②オリンピック後にハード面（施設）のみならずソフト面（競技者育成および指導者育成のシステムや、強化育成拠点の構築など）の財産（レガシー）を残すこと、という二つの大きな目標を掲げ、具体的な施策を展開してきました。

また、この秋にはスポーツ庁設置が予定されており、これを機に「スポーツを文化の域までに引き上げる」ための様々な取り組みがなされています。競技団体に対しても様々な改革が求められ、それらに対して真摯な対応をしております。コンプライアンスの遵守、ガバナンスの強化、アスリートファーストの徹底、コーチの資質能力の向上、アントラージュとの連携などがあげられます。これらの本連盟に関わる一連の活動に加え、加盟団体の法人化を進め、現時点では45の陸協に法人格を取得していただきました。スポーツ団体の健全性、社会的信用が求められる昨今、法人化は必要不可欠であるため、47加盟団体の法人格取得を目指します。

競技団体の重要な評価ポイントである国際競技大会での成績についても客観的分析が求められます。注目は、東京オリンピックに向きがちですが、競技力向上を考える上では2016年リオデジャネイロオリンピックをいかに戦うかが最重要課題であり、その布石となる2013年モスクワ世界陸上、2014年仁川アジア大会を軸に強化策を展開してまいりました。

この二つの競技大会を振り返ってみると、世界の壁、アジアの壁にはね返された感があります。世界陸上ではメダル1、入賞6、アジア大会では金メダル3という結果であり、今後、

徹底的な国際競技力強化が求められます。具体的には、ジュニア時代、大学時代に国際経験を積ませることが国際舞台での実力発揮につながるものと考えます。この具体的な施策としては、6月9日の安藤食文化スポーツ支援財団理事会で決定した“安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト”の実施があげられます。このプロジェクトは、若手アスリートの海外活動を支援し、トップアスリートとしての資質を身につけ、将来のメダリストの誕生を目指します。

次の2年に期すること

これからの2年は、2016年リオデジャネイロに向けての短期計画と2020年東京に向けての中期計画を同時に実行していく時期です。2020年に向けた長期的な強化育成プランを遂行するために、先述の2020PTが一本のルールとなります。もう一本は、言うまでもなくリオデジャネイロオリンピックに続くルールです。これら2本のルールは、リオデジャネイロオリンピック後に合体して1本になり、東京オリンピックを目指します。そのためリオデジャネイロオリンピックまでは2本のルールの連携を取りつつ、普及育成をも視野に入れながら活動を推進していく必要があります。この連携によりベテランと若手の融合をはかり、ベテランの有する経験知という財産を若手に授けたり、逆に若手がベテランに刺激を与えることで、2020年に向かう気持ちをより強いものにできると考えます。

これらの強化普及活動の根本を支えているのが、加盟団体や協力団体であると言えます。特に、陸上競技の普及と育成時期に該当する小学校から高校生までの活動を最も身近で支えているのが都道府県陸協です。そのため本連盟としても、これまで以上に地域の実状をヒアリングしながら、より良い協力・連携の体制が構築できるように心がけてまいります。

もう一つ、陸上競技の普及に関して、この2年間で本連盟が取り組まなければならない事項があります。それは、長年にわたり検討を続けてきた市民マラソンランナーの登録制度の制定です。空前のランニングブームは今も続き、笹川スポーツ財団の調査（2014年）によると、週2回以上ランニングを行う人口は374万人、年1回以上となると986万人にもなります。愛好者の中には、ランニングをスポーツととらえることなく、トレーニングも積まずにレースに出場したり、負担となるかぶり物を身につけて走ったりと、自らを危険な状況に置くランナーも多く見られます。ランニングを興味本位の一過性の趣味として終わらせるのではなく、生涯スポーツにつなげていきたいものです。これを可能にするために、登録制度を導入し、登録市民ランナーに対してのサポートを進めていくことを検討したいと考えています。

これらの活動を展開する上で、加盟団体、協力団体、スポンサー各社、陸上ファンの皆様の支えが必須となります。理事会、全委員会、事務局の総力を結集して、目標に向かってまいりますので、日本陸上競技連盟の活動にご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

専門委員長挨拶

役員改選にあたって専門委員長の挨拶を掲載致します。全10委員会のうち、既に2015年1月号で紹介を致しました強化委員会を除いた、総務委員会、法制委員会、財務委員会、競技運営委員会、普及育成委員会、国際委員会、施設用器具委員会、科学委員会、医事委員会の9委員会を紹介致します。



総務委員会 山本 浩

「アスリートファースト」が声高に叫ばれる時代です。選手第一主義が初めてメディアに登場したのは、2013年の東京招致をめぐる動きの中でした。スポーツをする人にも支える人にも、その言葉には新鮮な響きがありました。

陸上競技は、もともと選手第一主義を大切にしてきたスポーツです。時代におもね、規則を安易に変更したり、選手の安全を軽視したりせずに歴史を重ねてきました。

一方で、2020年を控えて、多くの人に陸上競技の魅力をこれまで以上に深く強く知ってもらいたいという気持も旺盛です。「9秒台の壁突破の瞬間を楽しみにする」「2時間5分台に突入するレースを見る」。日本中を陸上競技ファンで覆い尽くしたいとだれもが思っているはずです。

アスリート中心の強化、陸上競技を支えるファンの拡大を視野に入れた普及。二つのベクトルが同じ方向を向くことで、陸上競技界の前進は続くに違いありません。

「総務は百般に通ず」。新たに総務委員長を拝命し、皆さまと共に歩む立場に立った私の思いです。総務委員会は、歴史的には選手の海外派遣にも重要な役割を果たしてきた組織です。現在では、連盟の機構充実、新たな専門委員会の発足によりその役割を変えています。専門化、細分化された組織のつなぎ役としての機能はいつでも果たせるようにしておかなければなりません。

日本のアスリートで最初にオリンピックに足を踏み入れたのは、陸上競技界でした。長い歴史、深い伝統、揺るぎない精神。陸上競技が誇ってきたものをこの先もつなぐ責任が私たちにはゆだねられています。その証の一つが「九十年史」の制作です。その先の「百年史」の準備。「日本陸連アスレティックアワード」の更なる充実。総務委員会が率先しなければならぬテーマは明らかです。深い経験に裏打ちされた多くの人々の声を集約し、あるべき道を探りながら進んでいく。強い決意で力を合わせる所存です。



法制委員会 清水 真

このたび、新たに法制委員会委員長を拝命いたしました。

陸上競技の世界に本格的にかかわるのは、学生時代以来ということになり、多々勉強しなければならない点もあると感じているところですが、私は、こ

れまで、弁護士として、様々な組織において発生する様々な法的諸問題の処理にかかわって参りました。その中で学んだ最大のことは、いかに日常的に当然のこととして行われていることであっても、原理原則に従ってアウトなものは、いずれ大きなリスクとして顕現化するということです。特に、最近、コンプライアンス意識の高まりや、インターネットの普及による情報拡散の拡大を背景として、従前であれば問題にならなかったような問題がリスクとして顕現化することが格段に増加してきています。この状況は、スポーツ界も例外ではありません。リスクが一旦顕現化すれば、関係当事者の方々が大きく傷つくと共に、応援してくださる国民の皆様の期待を裏切ることにもなります。

こうした点に鑑みますと、法制委員会の最も重要な役割は、時代の変化を鋭敏に捉えつつ、陸上競技の世界において、重要なリスクを可及的に防止できる制度の構築・運用を図っていく点にあると思います。また、制度の構築・運用に当たっては、透明性という要素には特に注意を払う必要があるとも思っております。

競技者の方々、ファンの皆様等広く陸上競技を愛する国民の皆様のための連盟という本義を肝に銘じつつ、着実に取り組んで参りますので、よろしくお願いいたします。



財務委員会 小手川 強二

私は、これまで中学、高校、大学と足かけ10年間競技者として陸上競技に関わったのち、大分県臼杵市の陸協会長として20数年、大分陸協の会長として10年にわたり日本陸連にお世話になりました。特に、2008年大分国民体育大会開催に当たっては、日本陸連の皆様にご多大なご尽力、ご支援をいただきました。

今期新たに財務委員長として、我が国陸上界の発展に少しでも貢献できればと念じております。委員会としては、これまで通り「財政基盤の安定」「公益財団法人としての資金の透明化」「加盟団体への支援」の重要施策をおすすめてまいります。

陸上競技は、オリンピックの華と呼ばれるように、国民の多くから期待と注目を浴びる競技です。5年後には東京でオリンピック、パラリンピックが開催されます。すでに5年後を見据えた様々な対策が検討、実施されております。財務委員会として、そのような方向に対して強力に支援できるよう、財政基盤をより強固なものにしたいと考えます。

また、陸上競技の関係者の皆様の信用と信頼および協力を得るため、財務委員会としても情報の発信を的確に行う必要があると考えます。

何分不慣れな委員長ですが、皆様のご支援、ご協力のもと真摯に取り組んでまいりたいと思います。何卒よろしく願います。



競技運営委員会 鈴木 一弘

年号が昭和から平成に変わった年に競技運営委員会の前身である審判委員会のメンバーとして加わりました。今まで27年の間、組織改革で審判委員会と競技委員会が統合され競技運営委員会となりました。何も知らない一委員としてスタートしましたが、幹事や副委員長を経て審判部長を十数年務め、この度、吉儀宏前委員長から委員長職を引き継ぎ、本委員会の運営を任されることとなりました。改めて身の引き締まる思いをしております。

平成に入って公認審判員制度が見直され、第三種～終身第一種と四種別あった審判資格をB級・A級・S級の三種別に再編し、併せて4色あった胸章を緑一色にしました。吉儀前委員長の下で、審判員のレベルアップの目標ともなる指導的立場のJTO・JRWJが導入され競技会運営の正確性の向上が図られました。また10年経過して胸章もカード化され、よりスマートになりました。

これからの競技運営委員会の目標は、言うまでもなく2020年のオリンピック・パラリンピック競技会を成功に導くことです。そのためには競技者・観客・役員が一体となった競技会運営を目指し、ルールを熟知するだけでなく、多くの目線で物事を見聞きしていく審判員が求められます。またグローバル化・IT化に対応したスキルも求められます。それらをオールジャパン体制で実現させるためにJTO制度を更に充実させ、JTOを核に全国的なレベルアップを目指したいと考えております。オリンピック・パラリンピックに携わる競技役員の確保・研修については困難なことが山積みしています。競技役員の宿泊輸送・待遇（職専免やボランティア休暇の保証）・語学研修・競技運営研修・リハール競技会の設定等これから多くの加盟団体の方々と解決していかなければなりません。皆様のご支援ご協力をお願いする次第です。



普及育成委員会 繁田 進

当委員会は、陸上競技の裾野の拡大に向けて、陸上競技の普及と指導者養成を2本柱として各種施策を実施しております。当委員会が抱える課題は多岐にわたりますが、2020年東京オリンピックのレガシーとして何を残すのか、という大局に立って取り組んで参ります。とりわけ2020年へ向けには「グローバルスタンダード」をキーワードにIAAFが推奨する各種プログラムの実施やコーチングシステムと

の連携、さらにはイギリスやカナダが実施している競技者育成と生涯スポーツの融合モデルであるLTAD：Long-Term Athlete Developmentモデルの実施検討など、諸外国の好事例を積極的に取り入れていきたいと考えております。これらの実現に向けては、下記に記す通り普及政策部、普及育成部、指導者育成部、ランニング普及部の4つの部門が中心となって実施致しますが、各課題の実現には他の委員会や各都道府県陸協等の連携が不可欠であり、関係各位と一致団結して取り組む所存でございます。

1) 普及政策部

タレントトランスファーマップの作成や、日本版LTAD：Long-Term Athlete Developmentモデルの実施検討等を行います。

2) 普及育成部

昨期から継続してアスリート発掘育成プロジェクト(U13,U16)の実施や、IAAFキッズアスレティックスの実施等を行います。

3) 指導者育成部

強化委員会、医事委員会等と連携を図りながら、既存の指導者養成制度とIAAF指導者養成制度との連携、ジュニアからトップ選手までの一貫指導システムの構築等を行います。

4) ランニング普及部

今後の有効なランニング環境の整備やランニング指導者養成制度実施の実現に向けて取り組みます。



国際委員会 尾懸 貢

日本が世界の陸上競技界で置かれている立場を再考してみる必要があります。国際陸上競技連盟においては、オフィシャルブロードキャスターを東京放送ホールディングス(TBS)が務め、また4社もの企業がオフィシャルパートナーとして国際陸連の活動を支えています。これが世界に対する日本の貢献をアピールしていることは言うまでもありません。これに加え、競技力の向上や陸上競技の普及といった面でのさらなる貢献ができるように戦略を持って活動することが重要であると言えます。

こういった観点から日本が世界に向かってやるべきことを国際委員会から提案していきたいと考えています。そのためには、あらゆるネットワークを利用して多くの情報を集め、それらを正確に分析・評価していかなければなりません。特に2020年開催のオリンピック・パラリンピック競技大会を考えた場合、より一層の国際交流を深め世界の情勢を正確に把握したうえで、世界各国の東京オリンピックへの期待を実現していくことが、オリンピック全体の成功につながるでしょう。多くある競技団体のうちでも、陸上競技がその先頭に立って果たしていくべき役割だと思えます。

また、世界陸上競技選手権大会などの国際競技大会開催がわが国の競技者の強化育成および普及に及ぼす効果を明確に

し、招致をする際に取り組むべき課題の明確化、開催までのプラン作成などを国際委員会がリードして行っていく必要があると考えます。

国際委員会では、多くの有識者の力を結集して、これらの課題に取り組んでまいります。



施設用器具委員会 平塚 和則

このたび、前期に引き続き施設用器具委員会委員長を拝命いたしました。当委員会は本部の委員・検定員の他に全国の都道府県に1名の検定員（北海道は2名）、さらに2名の技術役員（北海道、沖縄は3名）、そして各県1名の自転車計測員（公認マラソンコース計測員、検定員・技術役員が兼務）を配している大きな組織であります。

この大所帯を束ね、また全国にあります公認陸上競技場・公認長距離競走（歩）路の検定業務、指導、管理等を司ることは容易ではありませんが、全国のどこの陸上競技場も同じ仕様で、選手に公平な競技会ができる競技場づくりを推進してゆくこと、また全国各地のマラソンコースも距離が正確であり、走る選手が公認コースの距離に疑問が残らないコース計測を目指してこれまで以上に、各検定員・技術役員とともに切磋琢磨して検定業務に精励していきたいと思っております。

昨今、特に短距離陣が力をつけて、国際的に記録が目されてきております。国際記録が認定される条件には、陸上競技場がIAAFのクラス1またはクラス2の認証を受けていないとはなりません。

日本陸連では第1種公認陸上競技場にIAAFクラス1・2の認証の申請を認めています。今後はIAAF認証を申請してくる陸上競技場が増えてくることが予想されています。これらに対応できるように検定員の技術の向上と国際陸連との密接な連絡を取りつつ、本連盟が国際競技会の開催でも問題のない陸上競技場の建設を目指し、使用する用器具もIAAF適用についての見直しを図り、日本陸上競技界発展のため、諸問題に取り組むたいと考えております。



科学委員会 杉田 正明

科学委員会では、オリンピックや世界選手権などで活躍できるトップアスリートの強化支援を主眼としながらも、年少者をも含めた長期的な視野に立って、総合的な医・科学サポート体制を整え、選手育成と競技力向上に寄与したいと考えています。現在の取り組みは、競技会におけるバイオメカニクスデータ収集及び分析データのブロック毎でのフィードバックや強化合宿及びJISS等を活用した研修合宿におけるサポート活動など、強化現場に密着し、個別的、実践的なデータ収集と即時フィードバックに重点を置いた活動を展開しています。昨年度から現場レベルでの科学データ普及

活動として、各地区高体連合宿における研修で、これまでの科学データの伝達講習会を実施しています。リオデジャネイロ及び東京オリンピックを見据えたマラソン、競歩の暑さ対策としては、実際のマラソンレース及び強化合宿時で測定を実施し、暑さに対する影響や負担度等を明らかにし、夏場のマラソン対策における具体的方策のためのデータ収集に取り組んでいます。さらに、東京オリンピック、ポスト東京を見据えたジュニア選手の種目転向や発掘について、これまでに収集されてきた体力データやトップ選手の履歴からトランスファーマップ（種目転向の道しるべ）作成作業に着手しており、ジュニアからシニアへの縦断的な科学的知見の蓄積を充実させる予定です。本委員会の活動成果は、陸上競技研究紀要および日本陸連HP等に情報発信をしていますのでご覧下さい。今後も強化委員会、普及育成委員会並びに医事委員会等関係の皆様と緊密な連携を図りながら戦略的かつ包括的な科学的支援活動をより一層、充実させていく予定です。本年度も科学委員会の諸活動にご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



医事委員会 山澤 文裕

医事委員会は医務部とトレーナー部より構成され、日本全国から委員を選出しています。2015、2016年度は、東京オリンピック2020に備え東京近郊の若手医師を多く登用しました。医師24名、管理栄養士1名、スポーツ免疫学者1名、トレーナー11名で構成される大きなチームとして活動します。

陸上競技者の皆さんが安心してプレーできる競技ルール作りと、競技会医務、ドーピングコントロール、トレーナー活動、日本代表チームドクター業務および競技者に対する健康相談、健康診断、障害予防、スポーツ栄養指導などを中心とした医学サポートを行っています。これらの事業を円滑に進めるため、主として強化委員会、普及育成委員会、科学委員会との連携を強化しなければなりません。そのうえで、リオ2016へ続く世界選手権北京大会の日本代表選手の健康管理と選手強化、さらに選手を育て上げる都道府県陸協の医務レベルアップを追求します。東京2020へ向け、競技者の障害予防は重要な課題で、特に発育期にある競技者のオーバーユースによる慢性障害を予防しなければなりません。陸協医務部の先生方と協力体制を構築したいと考えています。

さて、世界は規則や国際基準を定め、異なる文化や歴史を持つ様々な国・地域における問題を解決する時代です。筆者は国際陸連医事アンチ・ドーピングコミッション委員、アジア陸連医事委員として、これも含めた様々な問題解決にかかわっています。日本陸連の立場だけでなく、国際的な立場からの発信が、日本陸上競技界全体の発展のためにますます重要である、と考えています。

評議員会・理事会報告

第27回理事会

日時：2015年5月27日（水） 13時58分～15時59分

場所：小田急第一生命ビル 11階 会議室

【議題】

〈協議事項〉

1. 第4期事業報告・決算
2. 第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）に向けた2015年度ナショナルマラソンチームの編成について
3. 評議員会の開催

〈報告事項〉

1. 第22回世界ハーフマラソン選手権大会（2016／カーディフ）代表選手選考要項
2. 2015ワールドリレーズ（ナッソー）報告
3. 第1回アジアユース陸上競技選手権大会（2015／ドーハ）報告
4. 第21回アジア陸上競技選手権大会（2015／武漢）日本代表選手

【議事内容】

開会に先立ち、風間事務局長より理事定数29名、出席者数26名で本理事会が有効に成立した旨を報告し議題に入る。

〈協議事項〉

1. 第4期事業報告・決算
尾縣専務理事より事業報告について、杉本理事・財務委員長より決算について、山田監事より監査報告について、それぞれ資料に基づき説明があり、ともに承認された。
（資料1及び本連盟WEBサイト<http://www.jaaf.or.jp/rikuren/>参照）
2. 第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）に向けた2015年度ナショナルマラソンチームの編成について
原田理事・強化委員長より、第31回オリンピック競技大会に向けた2015年度ナショナルマラソンチームの編成について資料に基づき説明があり、原案の通り承認された。（資料2参照）
3. 評議員会の開催
尾縣専務理事より、評議員会の開催について資料に基づき説明があり、定時評議員会として2015年6月17日10時からの開催、また、評議員会として同日11時30分からの開催が承認された。

〈報告事項〉

1. 第22回世界ハーフマラソン選手権大会（2016／カーディフ）代表選手選考要項
原田理事・強化委員長より資料に基づき、報告された。（資料3参照）
2. 2015ワールドリレーズ（ナッソー）報告
原田理事・強化委員長より資料に基づき、リザルトの説明があり、男子4×100mリレーが3位に入り、第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）の出場権を獲得したことが報告された。
3. 第1回アジアユース陸上競技選手権大会（2015／ドーハ）報告
原田理事・強化委員長より資料に基づき、リザルトの説明があり、金メダル1個、銀メダル5個、銅メダル3個を獲得したことが報告された。
4. 第21回アジア陸上競技選手権大会（2015／武漢）日本代表選手
原田理事・強化委員長より資料に基づき、男子29名、女子28名の日本代表選手が報告された。
なお、非公開において、「第4期決算における収支相償の対応策」、「評議員選定委員会に推薦する次期評議員候補者」、「評議員選定委員会運営細則の制定」を協議し、原案の通り承認された。

定時評議員会

日時：2015年6月17日（水） 9時58分～11時28分

資料1 公益財団法人日本陸上競技連盟 第4期 収支決算書（対前年度）

（2014年4月1日から2015年3月31日まで）

（単位：円）

科目	第4期決算額	第3期決算額	増減
(1) 経常収益			
1. 基本財産運用収益	6,441,866	7,831,788	△ 1,389,922
2. 登録料受入収益	24,978,600	24,218,950	759,650
3. 加盟金受入収益	4,700,000	4,700,000	0
4. 受取寄付金	0	2,000,000	△ 2,000,000
5. 受取委託金・助成金	226,696,679	223,852,640	2,844,039
6. 事業収益	1,579,975,607	1,618,751,831	△ 38,776,224
7. その他事業収益	54,274,316	59,370,017	△ 5,095,701
8. 雑収益	5,080,883	8,090,870	△ 3,009,987
経常収益計	1,902,147,951	1,948,816,096	△ 46,668,145
(2) 経常費用			
9. 事業費	1,721,954,728	1,682,044,380	39,910,348
10. 管理費	86,457,855	90,590,208	△ 4,132,353
経常費用計	1,808,412,583	1,772,634,588	35,777,995
当期経常増減額	93,735,368	176,181,508	△ 82,446,140

場所：ハイアット リージェンシー東京 地下1階 「飛鳥」

【議題】

〈協議事項〉

1. 第4期事業報告・決算

【議事内容】

開会に先立ち、風間事務局長より評議員定数20名、出席者数17名で本評議員会が有効に成立した旨を報告し議題に入る。

〈協議事項〉

1. 第4期事業報告・決算
尾縣専務理事より事業報告について、杉本理事・財務委員長より決算について、前島監事より監査報告についてそれぞれ資料に基づき説明があり、ともに承認された。
（資料1及び本連盟WEBサイト<http://www.jaaf.or.jp/rikuren/>参照）
なお、非公開において、任期満了に伴う「理事及び監事の選任」を行い、原案の通り承認された。
（本号199頁参照）

評議員会（非公開）

日時：2015年6月17日（水） 11時42分～12時02分

場所：ハイアット リージェンシー東京 地下1階 「飛鳥」

【議題】

〈協議事項〉

1. 評議員会議長及び評議員会副議長の選任

【議事内容】

開会に先立ち、風間事務局長より評議員定数20名、出席者数17名で本評議員会が有効に成立した旨を報告し議題に入る。

〈協議事項〉

1. 任期満了に伴う評議員改選により評議員会議長及び評議員会副議長が承認された。
（本号199頁参照）

第28回理事会（非公開）

日時：2015年6月17日（水） 14時00分～15時05分

場所：ハイアット リージェンシー東京 地下1階 「天平」

【議題】

〈協議事項〉

1. 会長・副会長・専務理事の選定
2. 専門委員長の選定
3. 顧問の選任
4. 常勤理事の報酬

〈報告事項〉

1. 2015年度ナショナルコーチ、アシスタントナショナルコーチ、専任コーチ等及びマルチサポート事業雇用者
2. 第21回アジア陸上競技選手権大会（2015／武漢）報告
3. 「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」の実施について
4. その他

【議事内容】

開会に先立ち、風間事務局長より理事定数30名、出席者27名で本理事会が有効に成立した旨を報告し議題に入る。

上記の協議事項が承認され、また報告を行った。（会長、副会長、専務理事及び専門委員長は本号199頁参照）

資料2 第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）に向けた 2015年度ナショナルマラソンチームの編成について

1. 趣旨

第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）（以下、リオデジャネイロオリンピック）で、メダル獲得や入賞を目指すためには、リオデジャネイロオリンピックで想定される環境等への事前準備が不可欠である。

リオデジャネイロオリンピックで高いパフォーマンスを発揮できるように、本連盟の医事委員会と科学委員会及び日本スポーツ振興センターのマルチサポート事業と連携して、現在の日本トップレベルの競技者の能力をより高く引き上げるための取り組みを展開する。

また、リオデジャネイロオリンピック代表選手が、より良い状態でスタートラインに立てるように、ナショナルマラソンチームで蓄積したノウハウを活用して、万全の体制で本番に挑める体制を構築する。

2. 参考競技会

国際陸上競技連盟（以下、IAAF）が、第15回世界陸上競技選手権大会（2015／北京）及びリオデジャネイロオリンピックの参加標準記録として承認する競技会。

3. 編成基準

下記の優先順位で選考する。

(1) 選抜条件

- 1) 日本陸連設定記録（男子：2時間06分30秒、女子：2時間22分30秒）を満たした者
- 2) 第15回世界陸上競技選手権大会（2015／北京）マラソン代表となった者
- 3) 第17回アジア競技大会（2014／仁川）マラソン3位以内の者
- 4) ナショナルチーム標準記録（男子：2時間09分30秒、女子：2時間27分00秒）を満たした者
- 5) 第14回世界陸上競技選手権大会（2013／モスクワ）マラソン8位以内の者
- 6) 男女長距離・マラソン部長が推薦する者

4. 選考方法

2014年4月1日から2015年4月30日までの競技成績をもとに、長距離・マラソン部長が選考原案を作成し、専務理事の承認を経て決定する。

5. 活動内容

(1) 強化合宿

- 1) 男子
 - ①長距離・マラソン合宿（2015年7月下旬予定：北海道釧路市）
 - ②長距離・マラソン合宿（2015年9月上旬予定：北海道土別市）
- 2) 女子
 - ①アメリカ高地トレーニング（2015年7月上旬予定：アルバカーキ）

(2) 暑熱対策サポート

大会時、強化合宿時及び各トレーニング拠点での体重や深部体温

の測定及び尿検査等の医科学サポートと、暑熱環境下の給水や栄養等の対処方法を情報提供する。

(3) メディカルサポート

コンディションチェックシステムを活用して、本連盟医事委員会との連携のもとナショナルチームメンバーの障害、故障及び体調不良に対するサポート体制を整える。

(4) トレーニングの構築

リオデジャネイロオリンピック以降も、世界を目指す競技者と指導者が、積み上げたマラソントレーニング方法を活用できるようにノウハウを構築する。

但し、その情報の取扱いや公開方法は、ナショナルチームの競技者と指導者の合意を得て進める。

6. 義務

ナショナルチームの選手は、下記の義務を遵守する。

- (1) ナショナルチームの趣旨に基づき、リオデジャネイロオリンピックでのメダル獲得を目指し、競技力向上及び健康状態の保持に努める。
- (2) 正当な理由がある場合を除き、指定または推薦する行事に参加する。
- (3) 指定された測定及びメディカルチェックを受診する。
- (4) アンチ・ドーピングに関わる全ての基準を適正に遵守する。
- (5) メディカル情報、コンディション情報、トレーニング情報を定められた時期に提出する。

7. 同意

ナショナルチームの趣旨、活動内容、義務を了承し、同意した競技者をナショナルマラソンチームの競技者として指定する。

8. 追加条件

編成方針及び基準に基づき、2015年5月1日から2015年11月14日までの競技成績から追加をすることがある。

9. 補足

- (1) 活動方針や具体的な計画は、本連盟強化委員会が作成する。
- (2) ナショナルマラソンチームは強化委員会の傘下に置き、男女それぞれの長距離・マラソン部長が管掌する。
- (3) 編成にあたっては、競技者や所属チームの意向を配慮する。
- (4) ナショナルマラソンチームは、状況に応じて年度途中で変更することがある。
- (5) 各記録の有効期間は、下記の通り。
日本陸連設定記録：2014年4月1日～2016年3月13日
ナショナルチーム標準記録：2014年4月1日～2015年11月14日
- (6) リオデジャネイロオリンピックのマラソン代表選手の選考は、2015年6月に開催予定の理事会で承認される選考要項をもとに、代表選手を選考する。ただし、ナショナルマラソンチームの競技者は、リオデジャネイロオリンピックの代表選考の優位性を保証されるものではない。

資料3 第22回世界ハーフマラソン選手権大会（2016／カーディフ） 代表選手選考要項

1. 編成方針

第31回オリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）後のマラソンの強化施策の一環として、ロード種目に適性のある競技者に、国際競技会での経験を積ませる。また、トラックで実績のある競技者を、マラソンにトランスファーする機会として、ロード種目の国際競技会への挑戦を促す。

2. 参考競技会

- (1) 第34回山陽女子ロードレース大会（女子）：
2015年12月23日（祝・水）・岡山
- (2) 第70回香川丸亀国際ハーフマラソン（男子）：
2016年2月7日（日）・丸亀
- (3) 第44回全日本実業団ハーフマラソン大会（男女）：
2016年2月14日（日）・山口
- (4) 第99回日本陸上競技選手権大会・10000m（男女）：
2015年6月26日（金）～28（日）・新潟

3. 種目及びエントリー枠

- (1) 種目：男子ハーフマラソン、女子ハーフマラソン
- (2) エントリー：各5名以内（団体戦は上位3名の得点）

4. 選考基準

- (1) 選考競技会（1）～（3）の、各大会の日本人で最上位の者
- (2) 選考競技会（1）～（4）の、中で日本人8位以内に入賞した者
- (3) 日本学生陸上競技連合からの推薦で、次の基準記録を満たした者

	10000m	ハーフマラソン
男子	28分30秒00	1時間02分00秒
女子	32分30秒00	1時間11分00秒

※記録の有効期間は、2015年4月1日～2016年2月14日まで。

5. 選考方法

選考基準に則り、強化委員会で選考原案を作成し、専務理事の承認を経て決定する。

- (1) 選考基準（1）による内定は、該当する成績を収めた時点とする。
- (2) 選考基準（2）による選考は、全ての選考競技会終了後、編成方針及び選考基準に則り強化委員会で選考する。
- (3) 選考基準（3）による選考は、強化委員会が定める推薦基準に達していることを条件として、選考基準（2）と併せて強化委員会で選考する。

6. その他

- (1) 代表選手は、編成方針及び選考基準に則って選考されるが、その派遣人数は、国際陸上競技連盟が定めるエントリー数の上限の枠を保証するものではない。
- (2) 本大会までに故障等により競技力を発揮できない事態が生じた場合は代表を取消すことがある。
- (3) 本大会は、2016年3月26日（土）にカーディフ（イギリス）で開催される。

第21回アジア陸上競技選手権大会報告

強化委員長 原田康弘

はじめに

第21回アジア陸上競技選手権大会が中国・武漢で6月3日から7日の4日間（3日、4日、6日、7日）で開催された。日本選手団は、女子400mの青山聖佳選手が関西学生陸上競技対抗選手権大会での怪我で辞退し、急きょ、リレーメンバーに今シーズンのランキングトップの藤沢沙也加選手と入れ替えた。男子やり投げでもディーン元氣選手が練習中に右肩を痛め辞退することになり、男子29名、女子28名、役員20名の77名の選手団で臨んだ。武漢までのフライトは第1陣が30日に出発し、第2陣本隊が31日上海経由で武漢入り、棒高跳のポール関係で棒高跳の選手は北京経由で武漢入り、第4陣は1日、上海経由で武漢入りし、1日に全選手団が武漢入りをした。上海、北京とも乗り継ぎもスムーズに行われ、若干遅れはしたが、元気で現地入りできた。武漢は、中国でも三本の指に入る気温が高い都市であり、我々もそれなりの覚悟はしていたが、天候不順も相まって思ったほど気温は高くなかった。

生活環境

今回の生活環境は、今までのアジアの大会では最高の環境であった。与えられたホテルは日本選手団だけのホテルで、思うようにミーティングやインフォメーションボードの設営に十分なスペースが与えられ、ホテル内のTICについても日本専用で、練習や試合の移動のバス輸送時間についても、日本独自で調整できたことは大変良かったと思う。部屋についても、十分なスペースで非常にきれいで、申し分なく過ごせた。食事に関しても、バイキングスタイルで朝、昼、夜とレストランでの食事で、中華料理が中心であったが、野菜や果物、麺類など種類も豊富で、今までの中国での遠征で一番良かった食事内容であったと感じている。選手は、生活面でのストレスはほとんど感じなかったものと推測される。また、競技場までのアクセスも30分程度で、何も問題はなかった。

大会内容

今大会は、急きょ大会全体のスケジュールが変更になり、大慌てであった。5日間開催が4日間開催になり、期間中の5日の試合が3日と4日に振り割られ、急きょ予定していない種目が入るなど、コーチ、選手とも戸惑いがあったことが確かであるが上手く対応してくれた。

今大会の日本選手団成績は、金4、銀3、銅11の18個のメダルを獲得し、メダルテーブル4位、地元中国が金15、銀13、銅13で断トツのトップ、男子短距離などの活躍で2位にカタールが入り、3位はインドであった。

1日目

初日は、午前中に女子混成競技と男女100m、400m、110mHの予選等が行われ、女子100mでは福島千里選手が、準決勝で11秒28の記録で決勝進出、男子400mも佐藤拳太郎選手、北川貴理選手、女子400m青木沙弥佳選手、千葉麻美選手、女子100mHの木村文子選手、紫村仁美選手とも決勝進出した。しかし、男子110mHの古谷拓夢選手、佐藤大志選手は思うような力を出せず、予選敗退であった。午後には決勝種目が行われ、男子砲丸投は日本陸連の競技者支援制度を受けている山元隼選手がSBで6位入賞した。女子ハンマー投は、試合に持ちこむ器具検定でTICと採めたが、認めてもらい検定をパスし、試合会場で競技用として準備してあったが、試合開始して渡邊茜選手が投げる前の選手まで、そのハンマーを使用し、渡邊茜選手が投げる番になって、急きょIAAFの規定にないハンマーであることで、競技用のハンマーと認められず撤去された。抗議をしたが認められなく、使用した選手の記録が無効になった。その中で渡邊茜選手は競技に集中して最後まで勝負し銅メダル獲得したことは、非常に価値がある。また、女子1500mはスタートから

遅いペースでのレースであったが、ラスト300mからのスパートに飯野麻耶選手が対応して、銅メダル獲得した。期待していた女子100mH決勝では、前回の優勝者でもある木村文子選手が銅メダルで、紫村仁美選手が5位であった。女子走幅跳（平加有梨奈選手、甲斐好美選手）走高跳（津田シェリアイ選手）は、持っている実力を発揮できないまま終わってしまったが、今後期待して行きたい。

2日目

前日の予選、準決勝と圧倒的な走り、昨年のアジア大会で優勝したWEI選手との勝負となった女子100m、福島千里選手がスタートから飛び出し、ゴールまで他を寄せ付けなく11秒23で優勝した。追い風ではあったが日本記録に迫る記録で、完全復活を印象させたレースであった。男子400m決勝では、カタールのHASSAN選手が44秒68の世界的な記録で優勝した。佐藤拳太郎選手も積極的なレースで46秒09の自己新で銅メダル獲得し、北川貴理選手も46秒33の自己タイで5位入賞は、立派である。男子5000m決勝は、中東のカタール、バーレーンの移籍した選手との戦いで、4600mまで堂本尚寛選手がついて行ったが、ラスト1周のスパートでついでにつけて4位に終わってしまったが4位まで大会新記録であった。女子5000mも同様で、UAEの2選手がワンツーで、清田真央選手が4位、菊池理沙選手が5位であった。長距離種目にとって、小雨で気温も上がらなかったことで走りやすかった条件でもあった。フィールド種目では、優勝の期待された男子棒高跳では、小雨というコンディションではあったが、実力的には荻田大樹選手、山本聖途選手とも金メダルを獲得できる試合展開であったが、5m50で終わってしまった。試技で山本聖途選手が銀メダル、荻田大樹選手が4位、優勝は5m60であっただけに勝負できた。期待された男子走幅跳の菅井洋平選手も思うような跳躍ができなく、風も若干の向かい風での跳躍で6位に終わってしまった。今シーズン8m18を跳んでいるだけに残念であった。七種競技は、ヘンプヒル恵選手、宇都宮絵莉選手とも最後まで健闘し、二人ともラストの800mでは積極的なレースで締めくくった。ヘンプヒル恵選手が4位、宇都宮絵莉選手が7位であったが今後楽しみな選手でもある。女子400mリレーは世界選手権の資格を狙っていたが、中国に完敗した。

3日目

3日目は期待の男女400mH決勝が行われた。男子400mHでは、予選を吉田和晃選手、小西勇太選手、女子400mHでも吉良愛美選手、伊藤明子選手とも予選を上位のタイムで突破し、決勝に臨んだ。女子決勝は、バーレーンのOLUWAKEMI選手が54秒31の大会記録で優勝し、吉良愛美選手が57秒14で銀メダル獲得し、伊藤明子選手は7位であった。男子は台湾の陳選手との戦いで、前半、吉田和晃選手が良いリズムでリードし、陳選手、小西勇太選手が若干遅れ9台目のハードルを越え、ラスト直線で、3人の接戦になり、10台目を超えてからの小西勇太選手のスプリント力が増して、トップでゴールし優勝した。吉田和晃選手も3位の銅メダル獲得し、唯一ダブルでメダル獲得した。ベテラン村上幸史選手が出場した男子やり投は、アジアのレベルが非常に上がってきている中、4投目で79m05の会心の投げでトップにあがったが、5投目に台湾の黄選手が79m74で逆転され、6投目で、ウズベキスタンのBOBUR選手の79m09を投げられ、銅メダルに終わってしまった。十分チャンスがあっただけに残念である。女子棒高跳も中国の李選手が4m66のアジアレコードで優勝し、我孫子智美選手は4m20で銅メダルであった。男子三段跳は長谷川大悟選手が、しぶとい跳躍で6位入賞した。記録も16m36の自己タイ記録であった。男子十種競技の中村明彦選手の前半が終わり、4120点トップで前半終了した。

最終日

最終日は一日中雨で、肌寒くコンディショニングは最悪であったが、男子走高跳で優勝候補のBARSHAM選手（カタール）が思いがけなく2m24を三回失敗し3位、そのチャンスを生かしたのが衛藤昂選手で、2m24を一発で越え、試技数で優勝。雨の中確実に集中して跳躍できたことが勝利に結びついていたに違いない。高張広海選手もメダル獲得のチャンスは十分あったが試技数で4位であった。4つ目の金メダルが男子十種競技の中村明彦選手が前半のリードで後半もミスなく得点を重ね7773点で、2位に大差をつけて圧勝した。当初からアジア陸上競技選手権大会で優勝して世界選手権の出場資格を取る計画で望んでおり、有言実行できたことになる。女子10000mでは沼田未知選手が銅メダル、女子やり投では宮下梨沙選手が6投目で逆転して銅メダル、男子800m川元奨選手がラストしっかり銅メダル獲得、記録を期待していた男子4×400mRはオーダー提出後のアップ中に佐藤拳太郎選手が腹痛で出場が難しくなり、急きょ大瀬戸一馬選手と変更して臨んだ。カタール、サウジアラビア、日本と三つ巴のレースでアンカーまで大接戦のレース展開であったが3位に終わってしまった。女子も同様で中国、インド、カザフスタン、日本の順位で最後までセットしたレースであったが、目標とした記録まではいかなかった。また、男女200m決勝では、メダルを取ることができなく谷口耕太郎選手が20秒69で4位が最高であった。100m、200m、4×400mRの3冠したOGUNODE選手の圧倒したスプリント力が光った大会であった。

最後に

今大会は競技的には大きなトラブルがなかったが、ハンマーの検定に関して今後持参する場合のIAAF検定証が確実にあることを我々も確認する必要を感じた。大会審判も確実にルールに徹していた。

チーム全体としては、日本選手権前での大会で最高のコンディションをつくるのが各選手大変であったに違いない。その中でほとんどの選手がメダル獲得、入賞できたことは良かったと感じている。今後、アジアのレベル向上に伴い、アジア陸上競技選手権大会の取り組みを重視して行かなければならないことを再確認できた。エリアチャンピオンの価値を感じている選手が今回も頑張ったように感じている。最後に、今回の遠征では若手コーチが多く、いろいろな面での気遣いやチームの雰囲気作りなど、多様に活躍、協力していただいことに感謝致します。

第21回アジア陸上競技選手権大会（武漢 / 中国）役員・選手
大会期間：2015年6月3日～6月7日
役員（20名）

No.	役職	氏名	所属
1	監督	原田 康弘	理事・強化委員長
2	男子短距離コーチ	苅部 俊二	強化委員会 男子短距離部長
3	女子短距離コーチ	瀧谷 賢司	強化委員会 女子短距離部長
4	女子短距離コーチ	太田 涼	強化委員会 女子短距離部 幹事
5	ハードルコーチ	千葉 佳裕	強化委員会 ハードル部 委員
6	投擲コーチ	田内 健二	強化委員会 投擲部 幹事
7	投擲コーチ	高梨 雄太	強化委員会 投擲部 委員
8	跳躍コーチ	吉田 孝久	強化委員会 跳躍部長
9	跳躍コーチ	杉本 誠	強化委員会 跳躍部 委員
10	男子中長距離コーチ	平田 和光	強化委員会 中距離部長
11	女子中長距離コーチ	山田 里美	強化委員会 中距離部 委員
12	混成コーチ	金子 宗弘	強化委員会 混成部 委員
13	ドクター	櫻庭 景植	医事委員会 委員
14	ドクター	萩原 聡	医事委員会 委員
15	トレーナー	村上 博之	医事委員会 トレーナー部 委員
16	トレーナー	田村佑実保	医事委員会 トレーナー部 部員
17	トレーナー	常友 綾二	医事委員会 トレーナー部 部員
18	総務	吉川 三男	強化委員会 幹事
19	渉外	平野 了	事務局事業部
20	渉外	河合江梨子	事務局事業部

男子（29名）

No.	種目	氏名	所属
1	100m/4×400mR	大瀬戸一馬	法政大学
2	100m	小池 祐貴	慶應義塾大学
3	200m	谷口耕太郎	中央大学
4	200m	原 翔太	スズキ浜松 AC
5	400m	佐藤拳太郎	城西大学
6	400m/4×400mR	北川 貴理	順天堂大学
7	4×400mR	ウオルシュ ジュリアン	東洋大学
8	4×400mR	金丸 祐三	大塚製薬
9	800m	川元 奨	スズキ浜松 AC
10	1500m	戸田 雅稀	東京農業大学
11	1500m	廣瀬 大貴	大阪ガス
12	5000m	堂本 尚寛	JR 東日本
13	3000mSC	松本 葵	大塚製薬
14	110mH	古谷 拓夢	早稲田大学
15	110mH	佐藤 大志	日立化成
16	400mH	小西 勇太	住友電工
17	400mH	吉田 和晃	大阪ガス
18	走高跳	衛藤 昂	AGF
19	走高跳	高張 広海	日立 ICT
20	棒高跳	荻田 大樹	ミズノ
21	棒高跳	山本 聖途	トヨタ自動車
22	走幅跳	菅井 洋平	ミズノ
23	走幅跳	嶺村 鴻汰	モンテローザ
24	三段跳	長谷川大悟	日立 ICT
25	砲丸投	山元 隼	中京大クラブ
26	円盤投	堤 雄司	群馬総合ガードシステム
27	ハンマー投	田中 透	チームミズノアスレティック
28	やり投	村上 幸史	スズキ浜松 AC
29	十種競技	中村 明彦	スズキ浜松 AC

女子（28名）

No.	種目	氏名	所属
1	100m	渡辺 真弓	東邦銀行
2	100m/4×100mR	福島 千里	北海道ハイテク AC
3	200m/4×100mR	市川 華菜	ミズノ
4	200m/4×100mR	土井 杏南	大東文化大学
5	400m/4×400mR	青木沙弥佳	東邦銀行
6	4×100mR	北風 沙織	北海道ハイテク AC
7	4×400mR	藤沢沙也加	セレスポ
8	400m/4×400mR	千葉 麻美	東邦銀行
9	800m	大森 郁香	東京陸協
10	1500m	飯野 摩耶	東京農業大学
11	5000m	清田 真央	スズキ浜松 AC
12	5000m	菊池 理沙	日立
13	10000m	沼田 未知	豊田自動織機
14	3000mSC	高見澤安珠	松山大学
15	100mH	木村 文子	エディオン
16	100mH	紫村 仁美	佐賀陸協
17	400mH/4×400mR	吉良 愛美	アットホーム
18	400mH	伊藤 明子	筑波大学
19	走高跳	津田 シェリアイ	東大阪大学
20	棒高跳	我孫子智美	滋賀レイクスターズ
21	走幅跳	平加有梨奈	北海道ハイテク AC
22	走幅跳	甲斐 好美	VOLVER
23	円盤投	中田恵莉子	四国大学教職員クラブ
24	ハンマー投	渡邊 茜	丸和運輸機関
25	やり投	山内 愛	大阪成蹊大学
26	やり投	宮下 梨沙	大体大 T.C
27	七種競技	ヘンブヒル 恵	中央大学
28	七種競技	宇都宮絵莉	園田学園女子大学

河野洋平 本連盟名誉会長 国際陸上競技連盟 (IAAF) シルバー勲章受章

2015年6月8日(月)、河野洋平・日本陸上競技連盟名誉会長が、国際陸上競技連盟 (IAAF) より、シルバー勲章 (シルバー・オーダー・オブ・メリット) を受章いたしました。

勲章はこのとき来日中のラミン・ディアック IAAF 会長から直接手渡され、ディアック会長は河野洋平名誉会長の日本陸上競技界を牽引し、国際陸上競技界に貢献した功績を高く評価されており、同章が授与されました。

【IAAF 勲章について】

IAAF 勲章は、世界の陸上競技界に多大な貢献をした個人に IAAF が贈る最高の勲章で、ゴールデン (金章) とシルバー (銀章) があります。

なお、日本人による同章の受章は、2007年に金章を受章した故・青木半治氏 (元日本陸上競技連盟名誉会長)、2010年に銀章を受章した帖佐寛章氏 (元日本陸上競技連盟名誉副会長) 以来3人目です。



連載企画：世界のジュニア競技者育成 ①イギリスのジュニア育成システムの改革

普及育成委員会普及政策部長 伊藤 静夫

ジュニア育成の世界的動向をシリーズで紹介していく。
第1回はイギリスのジュニア育成システムを取り上げる。

オリンピック・パラリンピック招致活動において、プレゼンテーションの良否がしばしばその命運を決すると言われる。2020年東京開催へ導いたチームジャパンのプレゼンテーションは記憶に新しい。しかし何と言っても印象深いのは、2012年ロンドン五輪を引き寄せたセバスチャン・コーの最終スピーチではないだろうか。コーは、自身の競技生活をふり返った後、「スポーツに親しむ子どもたちを増やし、あらゆる人がスポーツを行う世界をロンドンから世界に広め、次世代へのレガシーとして引き継いで行きたい」と結んだ。モスクワ・ロス五輪で中距離二冠を達成した陸上界のスーパースターのスピーチでもあり、会場は魅了され拍手が鳴り止まなかった。

そこには、普遍的な価値と同時にむしろ斬新さが感じられる。決してその場しのぎの着想ではなく、イギリスが長く構想してきたジュニアスポーツ政策への確信が彼の発言からにじみ出ているからではないか。その確信とは何か？

1997年、イギリスでは保守党から労働党への政権交代があり、ブレア新政権はスポーツの分野でも精神的な政策を打ち出した。2002年の「ゲームプラン：スポーツ・身体活動推進計画」もその一つである。ここで特に注目されるのが「ジュニアスポーツ振興」を重視した点である。ともすれば、国民全体のスポーツ振興と一部トップアスリートの競技力向上施策とはしばしば離反しがちになる。古今東西どの国も抱える悩みであろう。「ゲームプラン」では、その連携を担う役割に「ジュニアスポーツ振興」をあてた。生涯スポーツと競技スポーツとを連携させる接着剤として「ジュニア育成」を間に置き、ジュニアの育成が国際競技力向上の基礎を築くとともに国民のスポーツ参加への下地をつくるという全体像を構想したのである（図1）。イギリスのこれまでのスポーツ政策の積み重ねの上に生み出されたアイデアであり、今日もこの流れは一貫して継承されている。イギリスには、ジュニア育成こそがスポーツ政策の中核をなすという確信がある。セバスチャン・コーのスピーチは、その確信を見事に表現しIOC委員のハートを

つかんだのではないだろうか。

ところでこうした発想は、必然的に旧来のジュニア育成を見直すきっかけになる。ジュニア期の早期専門化、競技会過多、基礎スキル育成の欠如、タレント発掘、育成システムにおける一貫性のなさ、教育機関とスポーツ団体間との連携の悪さ等々、旧来システムに課題は多かった。こうした反省から、とくに思春期前の小学校段階での基礎づくりと育成段階での一貫性の徹底が重視されたのである。このあたりの事情も我が国をはじめ多くの国の共通した課題であるが、具体的施策にまともでないのが実情と言わなければならない。

そうしたなかで「ゲームプラン」が興味深いのは、上記課題解決のためにかなり具体的なモデルを提示していることである。その一つが、競技者長期育成計画（Long Term Athlete Development；以下、LTAD）と呼ばれ競技者育成モデルである。LTADは、名称からすると競技者育成に特化したものという印象を受けるが、実際には国民全体の生涯スポーツ推進モデルになっている。さらに注目しておきたいのは、小学校期まではスポーツに専門化する前段階として「身体リテラシー」の育成を強調していることである（図2）。誕生から思春期までの発達段階において、基礎的な運動スキルを養い、同時に運動を楽しく自信を持って行えるといった心理的な側面、あるいは仲間と協調したりコミュニケーションしたりできる社会的側面の育成をも重視する。この身体活動の基盤を「身体リテラシー」と定義づけた。

「基礎づくり」と言われるとらえどころのない抽象概念を「身体リテラシーの育成」というより具体化したイメージに置き換えたところが、このモデルの真骨頂と言っているだろう。おもしろいことに、このモデル発案の中心人物が旧東欧圏ハンガリー出身のコーチでもあり研究者でもあったBalyiである。旧東側諸国におけるタレント発掘、育成システムのよいところだけ抽出し、自由主義国に応用できる形に再構築したモデルと言えようか。今日、LTADはジュニア育成の代表的なモデルとして世界的に知られる。今回は、ジュニア育成における早期専門化の問題を取り上げる。

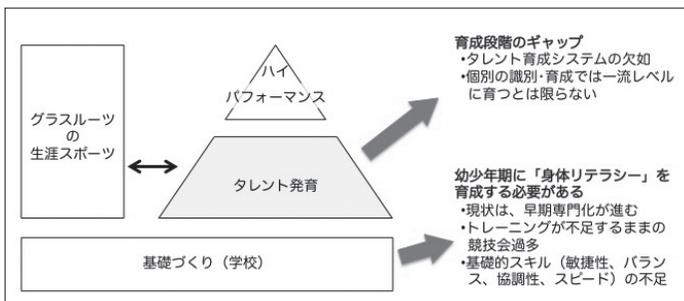


図1 ジュニア競技者育成システム：基礎づくりからハイパフォーマンスへ（イギリス、DCSM.2002）

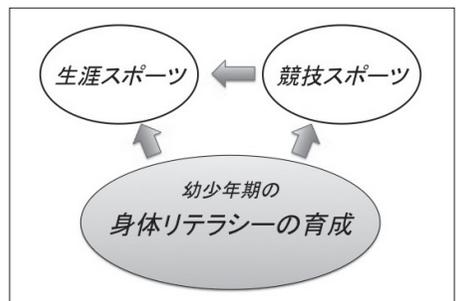


図2 身体リテラシーの育成：競技スポーツと生涯スポーツの基礎づくり

大会観戦ガイド

2015.7.1時点

今年もジュニア・ユース世代の夏が始まります。目指せオリンピック！若きアスリートたちの活躍を、ぜひ応援して下さい！

平成27年度 全国高等学校総合体育大会陸上競技大会 秩父宮賜杯 第68回全国高等学校陸上競技対校選手権大会

▼競技期日：7月29日（水）～8月2日（日）

総合開会式 7月28日（火）

陸上開始式 7月29日（水）

▼会場：紀三井寺公園陸上競技場

和歌山市毛見200

▼アクセス：

〈電車〉JR紀三井寺駅から徒歩で約30分

〈タクシー〉JR海南駅からタクシーで約15分

〈バス〉競技場前下車 徒歩3分

（JR和歌山駅前発より所要時間約40分）

1番乗り場より：「40系統 海南藤白」行き、「41系統 海南日限下」行き、「42・43系統 マリーナシティ」行き

2番乗り場より：「20系統 海南藤白」行き

▼種目：

〈男子〉21種目

100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、110mハードル、400mハードル、3000m障害物、5000m競歩、4×100mリレー、4×400mリレー、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、八種競技

〈女子〉17種目

100m、200m、400m、800m、1500m、3000m、100mハードル、400mハードル、5000m競歩、4×100mリレー、4×400mリレー、走高跳、走幅跳、砲丸投、円盤投、やり投、七種競技

▼放映予定：

7月30日（木）15：30～16：35 NHK Eテレ



昨年度の南関東総体より（男子4×100mR決勝）

7月31日（金）15：30～16：35 NHK Eテレ

▼問い合わせ先：

平成27年度全国高等学校総合体育大会

和歌山県実行委員会事務局 陸上競技担当

TEL：073-441-2927 FAX：073-427-4566

E-mail：riku2015@pref.wakayama.lg.jp

大会ホームページ <http://2015soutai.jp/official>

平成27年度 第50回全国高等学校 定時制通信制陸上競技大会

▼期日：8月12日（水）～15日（土）

開会式 8月12日（水）16：00～

競技会 8月13日（木）9：30～

8月14日（金）9：30～

8月15日（土）9：30～

▼会場：駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場

東京都世田谷区駒沢公園1-1

▼アクセス：

東急田園都市線「駒沢大学駅」下車、「公園口」の出口を出て、自由通りを南へ直進、「駒沢公園東口」から入場、陸上競技場（サービスセンター）まで、約15分。

▼種目：

〈男子〉15種目

100m、200m、400m、800m、1500m、5000m、400mハードル、3000m障害物、4×100mリレー、4×400mリレー、走高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投

〈女子〉11種目

100m、200m、400m、800m、3000m、100mハードル、4×100mリレー、走高跳、走幅跳、砲丸投、円盤投

▼問い合わせ先：

全国高等学校定時制通信制陸上競技大会事務局

（都立本所工業高等学校内）

TEL：070-6458-2364



昨年度の大会より（男子4×400mR決勝）

平成27度全国中学校体育大会 第42回全日本中学校陸上競技選手権大会

▼期日：8月18日（火）～21日（金）

開会式 8月18日（火） 15：00～15：50

競技会 8月19日（水） 9：00～17：30

8月20日（木） 9：00～17：00

8月21日（金） 9：30～16：00

閉会式 8月21日（金） 16：30～17：00

▼会場：札幌市厚別公園競技場

札幌市厚別区上野幌3条1丁目2番1号

▼アクセス：

〈電車〉地下鉄大谷地駅から徒歩で約20分

〈バス〉地下鉄大谷地駅から

・中央バス〈大66〉〈大67〉平岡ニュータウン線「平岡9条3丁目」下車 徒歩5分

・中央バス〈大92〉上野幌線〈大94〉上野幌循環通線「厚別公園入口」下車 徒歩5分

〈バス〉地下鉄新札幌駅から

・中央バス〈新93〉緑ヶ丘団地行「雇用促進住宅入口」下車 徒歩10分

・JRバス・中央バス交互運行〈循環新111〉新さっぽろ平岡線「上野幌2条1丁目」下車 徒歩5分

▼種目：

〈男子〉13種目

100m、200m、400m、800m、1500m、3000m、110mハードル、4×100mリレー、走高跳、棒高跳、走幅跳、砲丸投（5.000kg）、四種競技（110mハードル、砲丸投（4.000kg）、走高跳、400m）

〈女子〉10種目

100m、200m、800m、1500m、100mハードル、4×100mリレー、走高跳、走幅跳、砲丸投（2.721kg）、四種競技（100mハードル、走高跳、砲丸投（2.721kg）、200m）

▼放映予定：

8月21日（金）14：20～16：00 NHK Eテレ

▼問い合わせ先：

（大会開催前）

平成27年度全国中学校体育大会



昨年度の香川全日中より（女子100mH決勝）

第42回全日本中学校陸上競技選手権大会

全日本中学校陸上競技選手権大会事務局（札幌市立八条中学校内）

TEL：011-826-3683 FAX：011-831-3090

（大会開催中）8月18日（火）～21日（金）

[昼間]厚別公園競技場 TEL：011-894-1144

[夜間]アートホテルズ札幌 TEL：011-512-3456

大会ホームページ

<http://hokkaido-rikkyo.jp/do/2015zencyu/15top.html>

“日清食品カップ” 第31回全国小学生陸上競技交流大会

▼期日：8月22日（土）

開会式 8：30～

競技会 9：30～18：00

▼会場：神奈川県・日産スタジアム

神奈川県横浜市港北区小机町3300

▼アクセス：

JR新横浜駅から徒歩15分

地下鉄新横浜駅から徒歩12分

JR小机駅から徒歩7分

▼種目：

〈男子〉8種目

6年生100m、5年生100m、80mハードル、走幅跳、走高跳、ソフトボール投、4×100mリレー

〈女子〉8種目

6年生100m、5年生100m、80mハードル、走幅跳、走高跳、ソフトボール投、4×100mリレー

▼参加者：小学生5・6年生に該当する年齢で、各都道府県での選考会を経て選ばれた代表選手22名と指導者4名とする。

▼放映予定

8月29日（土）14：00～15：30 NHK Eテレ

▼問い合わせ先：

日本陸上競技連盟 TEL：03-5321-6580 FAX：03-5321-6591

大会ホームページ

<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1280/>



昨年度の大会より（男子4×100mR）

事務局からのお知らせ

◆「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」

～2020年へ向けた若手アスリートの海外挑戦支援～の実施◆◆

日本陸連と公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団は2020年へ向けた若手アスリートの海外挑戦を支援する「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」の実施を決定しました。

概要…将来国際大会でメダル獲得を志す陸上競技の若手アスリートの海外挑戦を支援する。

目的…本プロジェクトを通じて、トップアスリートとして求められる資質を身につけ、将来のメダリストの誕生を目指す。

支援内容…(1) 海外長期活動支援 海外大会の転戦、海外大学への進学、留学など

(2) 海外短期活動支援 1ヶ月～3ヶ月での海外合宿、短期留学など

▼現在海外長期活動支援のエントリーを開始しております。エントリー期間6月24日(水)～7月24日(金)

▼詳細は公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団HPをご覧ください。

<http://www.ando-zaidan.jp/>

◆◆日本陸連公式アプリが登場しました◆◆

日本陸連公式アプリがiOS、Androidで登場しました。

現在は下記の内容を掲載しており、随時アップデートを行っていく予定となっております。

◎トピックス

日本代表選手の発表や大会結果などの情報を随時配信！ お見逃しなく！！

◎大会情報

今年度開催される大会の情報を確認いただけます。

スケジュールをチェックして、是非会場にお越しください！

◎選手名鑑

選手のプロフィールや大会成績などが閲覧できます。

新たなお気に入り選手が見つかるかも！？

◎Athletics.tv

過去に行われた大会の動画を視聴できます。

大会の興奮をもう一度味わえます！

◎Facebook

Facebookの情報を閲覧できます。

イベント情報や大会情報などを随時配信！

▼ダウンロードURLは下記からお願いします。

iOSは<https://itunes.apple.com/jp/app/jaaf-official/id980495987?mt=8>

Androidは<https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.or.jaaf.apps>



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩 (陸連会長)
友永 義治 (陸連副会長)
八木 雅夫 (陸連副会長)
尾縣 貢 (陸連専務理事)
原田 康弘 (陸連強化委員長)
風間 明 (陸連事務局長)
牧野 豊 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘

◇時報編集担当

繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
高橋 祐哉
小川ちあき

陸連時報編集室

〒163-0717

東京都新宿区西新宿2-7-1

小田急第一生命ビル17階

公益財団法人日本陸上競技連盟 内

TEL 03-5321-6580

FAX 03-5321-6591

WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>

公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>